アンケートにみる過去10年間の
現代女性の髪色観の変化

「おしゃれ白書 1991～2000」より

染毛率は全体では３人に２人、
「24-29歳」では４人に３人に増加。

茶髪を許容する人は88％に。

2001年11月15日

ポーラ文化研究所
村澤博人/阿保真由美

はじめに

ポーラ文化研究所では1997年に「アンケートにみる髪色観」と題したレポートを発行している。このレポートはその延長で、2000年のデータを入れてまとめ直している。

前回は長年黒を日本人の髪の色の象徴としてきた価値観が崩壊し、「黒も選択肢の一つ」となったと結論づけた。その後３年経て、データはどう変わり、女性たちの気持ちはさらに新たな価値観形成に走っているのだろうか。

そこで、ポーラ文化研究所の「おしゃれ白書2000」を交えて、髪色観の変化を探ってみることとした。

Ⅰ．目的

「おしゃれ白書 」における髪色観の変化を探る。

Ⅱ．調査概要

「おしゃれ白書 」は、ポーラ文化研究所が1979年以来継続している調査で３年毎に実施しているが、染毛率などのデータを取りはじめたのが1991年からである。したがってこのレポートではその後の2000年までの４回（1991年、1994年、1997年、2000年）、10年間の変化を追うことになる。最新版の「おしゃれ白書 2000」の概要は以下の通りとなる。それ以前とは調査対象者の人数がその時によって多少異なる程度で、大差はないと判断している。調査時期も毎回、５月から６月である。

調査地域：首都圏３０キロ圏内
調査対象者：上記エリア内に居住する15歳からから64歳までの女性、910人

サンプルデザイン（単位：人）
15～18歳（高校生） 70
19～23歳（学生） 70
19～23歳（社会人） 70
24～29歳（未婚） 70
24～29歳（既婚） 70
30～34歳（未婚） 70
30～34歳（既婚） 70
35～39歳 70
40～44歳 70
45～49歳 70
50～54歳 70
55～59歳 70
60～64歳 70

調査対象抽出法：エリアサンプリング法

調査方法：戸別訪問面接聴取法および留置法の併用

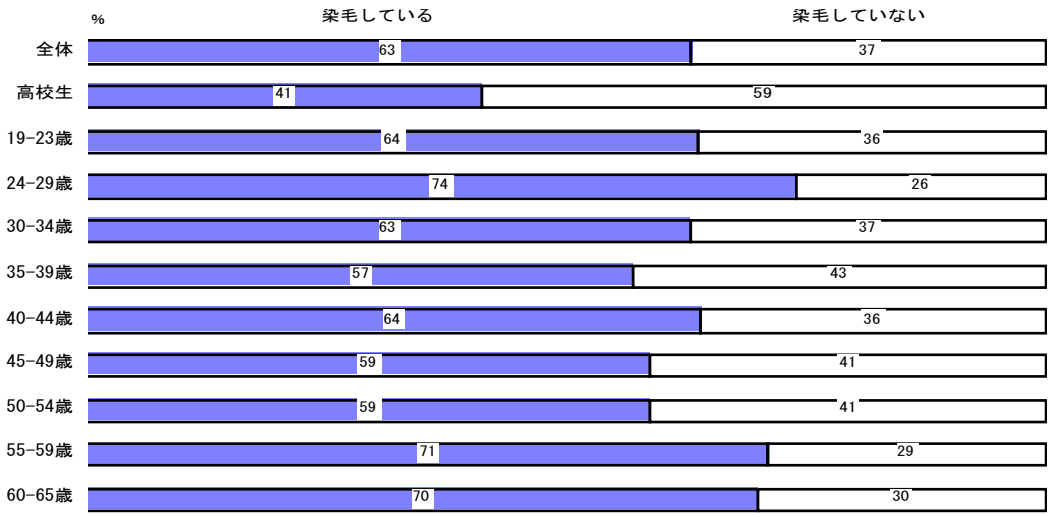
調査期間：2000年６月

Ⅲ．調査結果

Ⅲ-1．「染毛している人」は？－－－３人に２人が染めている時代

「染毛している人」を2000年のデータ（グラフ１）でみると、全体では63％、すなわち３人に２人が染めている。年齢別に見ると、高校生が41%と一番低い。一番高いのは24-29歳で74％、続いて55-59歳71

グラフ１　染毛している人（2000年）



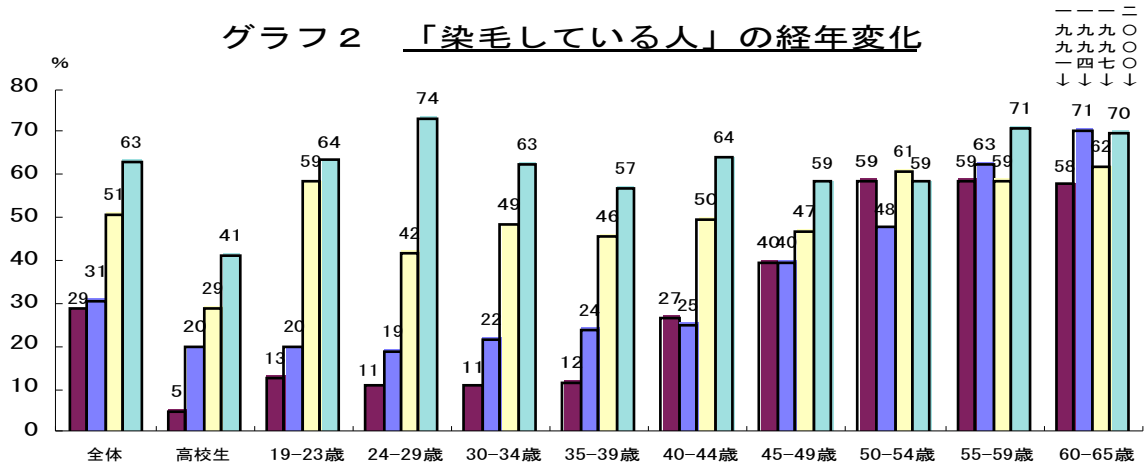
％、60-65歳で70％と続く。高校生を除く残りの女性はほぼ60%前後という結果であった。

1991年以降の経年変化をみてみると、グラフ２のようになる。1994年、1997年、2000年とほぼ10年間の変化である。1991年「染毛していた」女性は全体では29％。高校生で５％、20代30代では10数％と低い。それに対して、白髪染めをしている50代以上では60%近い結果であった。

1994年の結果は、40歳以下では1991年のほぼ２倍近い伸びとなって増えているが、40代後半以上では多少の増減はある程度で明確な方向性は見られない。

2000年、すなわち10年の変化を見ると、全体では２倍強の増加である。詳細をみると、高校生では８倍、20代前半から30代後半までは５～６倍前後の増加が見られる。40代は前半で２倍強、後半で５割増えてい

グラフ２　「染毛している人」の経年変化



「おしゃれ白書91　94　97　2000」より

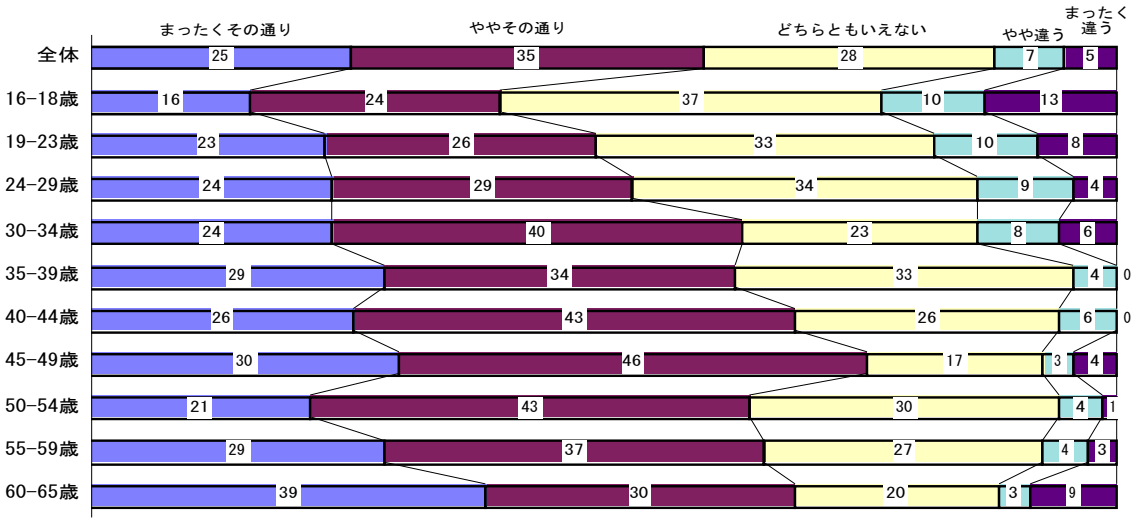
る。50 代前半では変化はなく、50 代後半以上では10%以上の増加傾向が見られる。

高校生から30代後半までの伸びが著しいが、いうまでもなく、おしゃれ染め、いわゆる茶髪系の染めであろう。2000 年になって、高校生を除く全年齢で染毛している人は半数以上となった。

Ⅲ-2. 「白髪は染めたほうがよい」か？－－－白髪もすてき！

毛染めというと、かつては白髪染めが主であった。茶髪がこれほど普及した現在、白髪に対する意識は変わったのだろうか。

グラフ３　老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい（2000年）

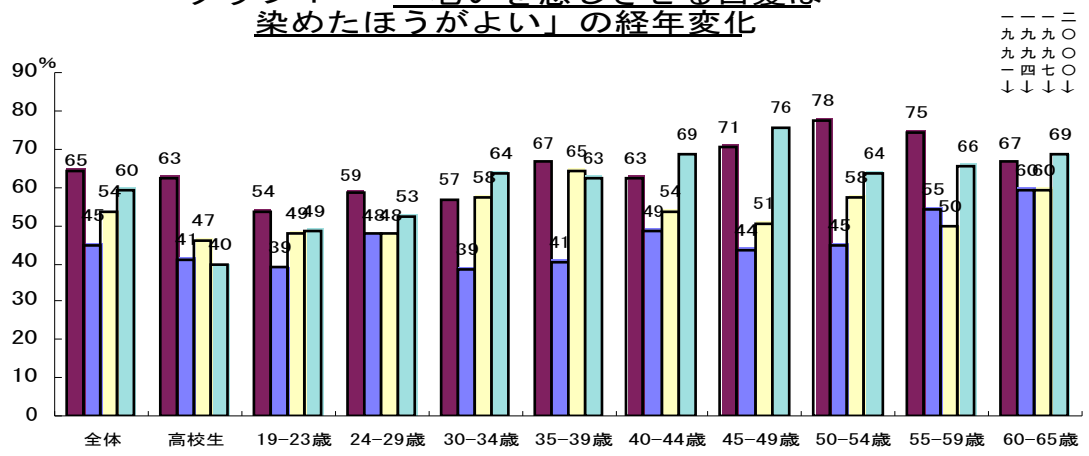


「老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい」と思うかどうかの結果はグラフ３となる。

全体では、半数以上（「まったくその通り」と「ややその通り」を合わせた「その通り」）の60%が「白髪を染めたほうがよい」と考えている。年齢別に見ると、高校生から40代後半まで増加傾向にあるが、50代前半で一度下がり、再度、年齢とともに微増している。

では1991年からの変化はどうだろうか。グラフ４にその結果を示す。全体では1994年」に一度下がり、

グラフ４　「老いを感じさせる白髪は染めたほうがよい」の経年変化



「おしゃれ白書91　94　97　2000」より

表１ 世代ごとの10年後の白髪支持率の変化

「16-19歳」 → 「25-29歳」
63％ → 53％ ― 10
「20-24歳」 → 「30-34歳」
54％ → 64％ ＋ 10
「25-29歳」 → 「35-39歳」
59％ → 63％ ＋ 4
「30-34歳」 → 「40-44歳」
57％ → 69％ ＋ 12
「35-39歳」 → 「45-49歳」
67％ → 76％ ＋ 9
「40-44歳」 → 「50-54歳」
63％ → 64％ ＋ 1
「45-49歳」 → 「55-59歳」
71％ → 66％ ― 5
「50-54歳」 → 「60-64歳」
78％ → 69％ ― 9

その後増加し、2000年にはほぼ1991年の数値に戻っている。

年齢別にみると、高校生、50代女性で1991年に対して2000年が大きく減少していた結果を除いて、ほかは５％前後の増減の範疇に入る。

念のために、世代ごとに10年後のデータを比較して増減を記したのが表１である。

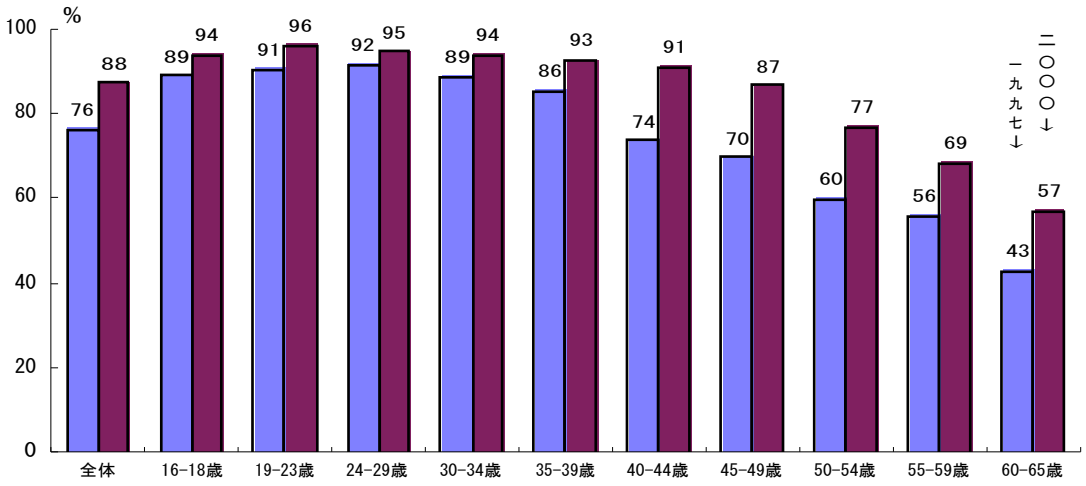
これをみると、現在「24-29歳」と「55-59歳」「60-65歳」で減少が見られるが、現在30代、40代では増えている。

Ⅲ-3.「茶髪は似合えばよい」―――肯定する人が増加！

「茶髪は似合えばやってもよいと思う」かどうかについては、1997年から質問項目に入れている。その結果を1997年と2000年の結果を比較すると、グラフ５となる。

全体では、76％から88％と12％増加している。年齢別にみると、高校生から40代前半までが90％以上の支持率を得ており、とくに40歳以上（支持率の絶対値は低くはなるが）で肯定する人が増えているのがわかる。全体として肯定する人が増加しているといえよう。

グラフ５　茶髪は似合えばやってもよいと思う人



「おしゃれ白書2000」より

Ⅳ．考察

1997年に同様の「髪色観」のレポートを発行しており、「黒い髪は選択肢の一つになった」と結論づけている。今回のレポートは結果的にはそのフォローとなる。全体としては、ますます髪を染めるようになり、色の選択の自由度が増しているといえよう。

では、前回のレポートでも指摘した「髪の毛の色のもつイメージ」についてはどうだろうか。前回は今回と同様、白髪のイメージのデータと、欧米のおける髪の色のイメージ、赤毛に対する偏見などを紹介し、日本では黒と白以外の色の意味が歴史的に文化的に育っていないことを指摘した。

今回の調査では、グラフ４で示したように、全体での傾向と個別の年齢別による変化とが多様になっており、一概には結論づけしにくいことは確かである。

そこで、次のように考えてみた。

(1) 茶髪とはもともとの黒い髪を嫌い、脱色・染毛した結果である。つまり、「脱黒」志向が存在する。

(2) 白髪に対する意識は「白は老いを感じさせるから染めるべき」とする「脱白」志向がある一方、「白はそれなりに美しい」とする「白肯定」志向がある。

このように整理していみると、「脱黒」志向は1990年代に急増したことは調査結果からも読み取れる。その結果はすでに述べたように、「黒い髪」は選択肢の一つになりさがったのである。

「脱白」志向は、白髪が増えはじめる40代から50代にかけて1994年以降、増加して1991年レベル前後には達している。茶髪に流行前に、中高年以上の方の白髪がパープルやブルー、グリーンに染まったことが話題となったが、もともとのダークな色に染める以外にも「脱白」は存在した。

「白肯定」志向に、ガングロのヤマンバ（顔をダークにメークしながらも髪の毛は白に脱色する若い女性たち）を入れることには賛否あるかもしれないが、高齢者にとっては自然な白さをきれいに見せることもまた、オシャレの一つとして容認されるようになっている。髪の色が白いことは美とされ、必ずしも高齢者としてのマイナスイメージではないということも成り立っているようにもみえる。

ただ、色に対する態度としては、この調査で88％の人が茶髪も似合えばよいとする回答を得ており、自由に振る舞える印象を感じるが、茶髪を禁止する企業もまだまだあると聞く。機会があれば、企業活動とファッションの自由度の関係などを調査しながら、髪の毛の色のもつ意味をさらに探ってみたいと思っている。